グローバル化時代における大学の
短期語学研修プログラムの真価

—日本語・日本文化サマープログラムの実践と考察—

杉原道子
内山浩道
家根橋伸子
石口智堂
徳永慎太郎

要旨

山口大学が開催した日本語・日本文化サマープログラムに参加した44名の受講生は日本語学習と日本文化体験を連動させたプログラムによって飛躍的にコミュニケーション能力を向上させることができた。猛暑の中、厳しい研修内容にも関わらず、受講生の多くは将来日本と関係のある仕事がしたいという強い目的意識を持っていたため、意欲的に勉学に励んだものと思われる。研修後、山口大学のシラバスが評価され、受講生のいくつかの在籍大学において単位が認定された。各国の大学においてシラバス内容を検討し、１か月というような短い期間であっても相互に単位認定を行うことによって、受講生のモティベーションを高め、相互交流が活発に行われるものと思われる。

キーワード

サマープログラム、日本語・日本文化、異文化理解、地域交流、学生交流

１．はじめに

グローバル化する経済・社会の中では、ますます重要となる我が国と諸外国との間の親密な人的ネットワークを形成するとともに，相互理解の増進や友好関係の深化を図ることは極めて重要な課題である。多くの大学において大学間交流協定に基づき、１年間の交換留学制度が実施されているが、経済格差や各

国における就職問題、単位認定など諸問題が未解決の現状では、1 年間留学できる学生の数は限られている。1 ヶ月程度の留学期間ならば、就職問題や留年を考えることなく、比較的気軽に参加できるであろう。経済的負担が少なくなれば、2～3 カ国への留学も可能となる。海外のいくつかの大学においては、海外の大学における単位取得を卒業の条件にしている大学もある。今後、世界各国の大学が短期プログラムを実施することによって、大学在学中に海外留学する学生数が飛躍的に増加することが期待される。グローバルな視点で世界の国々または自国を、見直すような機会を与えることは大学にとっても極めて重要な課題である。

以上の観点に立って山口大学が実施した「日本語・日本文化サマープログラム」(2010 年 7 月 11 日～8 月 6 日）を振り返りその成果と今後の課題を考察する。

２．プログラムの目標

プログラムの目標は以下の三点である。

①山口大学の留学生数を増やす。

留学生数の増加を図るために、海外の学生を対象に山口大学サマープログラムへの参加者を募集し、短期の留学体験を可能にする。

②日本語･日本文化への理解を深める。

日本語･日本文化に深い関心を持っている世界各地の学生を呼び､山口県での実際の生活体験を通して日本語･日本文化への興味や関心を深める。

③参加者の日本語でのコミュニケーション能力を高める。

大学構内だけではなく､地域社会の様々な場面において､場に即した日本語の表現を習得することにより､日本語でのコミュニケーション能力を高める。

３．プログラムの概要

教育環境や学習歴の異なる学生が一堂に会したサマープログラムの企画に当たってグローバルな視点に基づいた理論と実践が反映されるように努めた。

プログラムの内容は資料Ⅰに記されている通りである｡概要は下記の三つに分けられる。

①日本語教員による教室内での日本語の授業（1 コマ 90 分)。

②生の日本語に触れる機会となる教室外活動 (市場調査､小学校訪問､日本料理教室)。地域の協力を通して日本語によるコミュニケーション能力の向上を図る。

③日本文化への理解を深める教室外活動 (茶道･華道教室、美術館訪問、NHK 訪問、マツダ自動車工場見学、市内見学、ホームステイ等)。

４．募集と受け入れ態勢

４－１．募集について

プログラムの実施は 2010 年 2 月下旬に決定された。それに伴い、日、英、中、ハングルの４カ国語の募集要項を作成し､ホームページ上で広報活動を開始した｡学術交流協定校にはＥメールや書類を郵送することで､学生への周知を依頼した｡そのうえで留学生センター長、留学生センター主事、教員が各当該校を訪問し､プログラムの詳細な説明を行った｡募集対象者は高等教育機関の在籍者や学術交流協定校在籍者に限定せず､広く日本語学習と日本文化体験を希望する者とした。

参加者は5カ国（台湾・中国・韓国・英国・マレーシア）から44名で、関連する所属教育機関は13校であった。

４－２．受け入れ態勢について

広報開始時点から、専用のＥメールアドレスを開設し、参加希望者からの様々な質問に応えられるようにすると共に、参加者に送る情報を一カ所にまとめ、連絡漏れがないように配慮した。各種の問い合わせには事務担当者が、必要に応じて留学生センター長や教育担当教員と随時協議を行った上で回答した。大学へのアクセス情報や宿舎等の宿泊関連情報等も渡日前にＥメールにより提供した。

５．講師と参加者のプロフィール

５－１．担当講師のプロフィール

クラス担当講師は５名で、徳永が日本語Ⅰ（初級レベル）、石口が日本語Ⅱ（初級後半～中級前半レベル）、家根橋が日本語Ⅲ（中級後半レベル）、杉原と内山が日本語Ⅳ（上級レベル）を担当した。プログラムコーディネーターは山口大学の杉原が務めた。クラス担当講師のうち２名は海外からの参加者で、国際性を有するプログラムとなった。

５－２．参加学生のプロフィール

参加者のプロフィールは多岐に渡っていた。日本語を専攻している者が一番多く19名（約43%）で、経営学、中国文学専攻が各3名、土木工学、食品化学、心理学、日本文学が各2名で、さらに旅行、会計、生態学、国際貿易、外国文学、情報管理、経済学、工業工程、園芸、室内設計を専攻している者が各１名であった。未記入が１名あった。

６．クラス分け

山口大学留学生センターでクラス分けに使われているJ-CAT（Japanese Computerized Adaptive Test）テスト(注1)を使用し、プレースメントテストを実施した。J-CATには聴解・語彙・文法・読解のテストがあり、配点はそれぞれ100点で合計が400点満点になる。聴解・語彙・文法・読解の中では聴解テストの得点差が一番大きかった。初級レベルの学生は漢字圏の学生か非漢字圏の学生かによって漢字を認識する時間差がかなり違う。非漢字圏の学生は「決められた時間内に漢字が思い出せないため途中で時間切れになってしまうことが多い」と訴えてくる者も多い。日本語は漢字仮名混文であるので、当然とも言えるが、日本語の総合能力を測る基準としては、文字情報に偏りすぎる傾向があり、今回のみならず、一般的には漢字圏の学生のほうが高い合計得点が得られやすいという傾向がみられる。しかし、漢字圏の学生は語彙や読解ではかなり得点できても、聴解が全くできない学生もいる。実際、今回の聴解テストにおいて受講者44名中３名が0点で、20点以下の学生は4名であった。当該サマースクールの目標としてコミュニケーション能力の向上を図ることを掲げた。日本語及び日本文化の知識に基づいた日本語による伝達能力の向上を育成することを目的としているため、聞く能力や話す能力がどのぐらいのレベルかあらかじめ把握しておく必要があった。そこでプログラムコーディネーターの杉原はJ-CATテストの結果のみでクラス分けを行わず、オーラルテストを行い、J-CATテストを50%、オーラルテストを50%の配点とし、合計点数の高い順にクラス分けを行った。授業の効率性を考え、各クラスの構成人数を上

限12名にとどめた。

オーラルテストに際しては、全員に同じ質問をした。判定項目を難易度、正確さ、流暢さ、発話量にわけ、それぞれの項目を得点化して、日本語運用能力のレベルを判定した。5名の教員が４グループに分かれ、学習者一人につき10分程度の時間配分とした。初めに名前と国または出身地を尋ね、その後下記の項目について質問した。

①あなたの趣味は何ですか。（趣味、好きなこと）

②日本語をどのぐらい勉強しましたか。（期間、教科書等）

③どうして日本語を勉強したいと思いましたか。（動機）

④山口県について知っていることを話してください。（山口県について答えられない場合は質問を日本に変える）

⑤将来どんな仕事がしたいですか。（進路）

受講者が理解できない語彙や表現については易しく言い換えた。オーラルテストを導入することによって、サマースクールの目的にそった適切なクラス分けが可能となった。

７．授業内容の実践と考察

＊日本語Ⅳクラス（担当：杉原、内山）

クラス構成と授業のねらい：J-CAT テストとオーラルテストの総計上位 12 名で構成する。台湾（5 名：男性２名、女性３名）、韓国（男性１名）、中国（女性６名）からの学習者で、全員が大学で日本語を履修していた。台湾の数名を除いてほとんどが日本語を主専攻としている。参加の動機は日本のアニメなどメディア関連への関心が大半を占めた。読み、書き、聞く、話す、における技能面は拮抗しているため、授業のねらいを、理論と活用のつながりを深化させ、異文化体験によるコミュニケーション能力の向上を図ることとした。

教科書：教科書は発注の都合上クラス分けのテストを行う前に選定した。応募の段階で、日本語が主専攻の学生が数名いるため本来の上級日本語の教科書にすることもできた。各クラスの人数配分上、中級レベルの学生も入ってくることを想定して、くろしお出版『上級へのとびら』とした。「聴く」「話す」の能力に自信がないという理由でレベルの１つ低いクラスへの移動を希望した学習者が２名いたが、一日だけ試しに移動したクラスはレベルが低すぎたとのことで戻って来た。こういう生徒のためにも、マルチメディアによるコンテンツを教室外で学べるようになっている教科書を選んだのは妥当だったのではないかと考えられる。

授業の工夫：学習者の知的好奇心を呼び起こし、学習意欲を高めるために補助教材の選定には慎重な配慮が必要とされた。日本人や日本文化について学習者の知的レベルにそうように幅広いジャンルの題材を扱う必要があった。現代日本事情的コンテンツの展開や豊富な談話例にみられる口語表現例などを活用することにした。シンタクスの面では類似表現の分析や日本固有の文化や習慣を反映する表現を分析した。また、華道や茶道などの授業外活動の内容が十分に理解できるように、事前に道具や器具についての用語説明を行った。茶席などで交わされる敬意表現については尊敬語、謙譲語、美化語の総括的な学習の上で、微妙なニュアンスの違い等について学習させた。マンガをはじめとするメディア媒介の日本語に慣れていることを考慮に入れて、相づち表現など口語表現の談話練習を多く取り入れた。また、ホームステイ

後は、山口地方独特の方言に興味を示していた。

成果:将来翻訳や日本企業での通訳を希望する学習者が多く、真摯な学習態度と学習意欲の成果が、学習成果発表会の場において遺憾なく発揮され、見事なスピーチを行った。1ヶ月とは思えぬほどの学習成果を上げることができた。また、学習者の母国における実践面重視の日本語教育のグローバルな動きを実感させられた。課題発表や学習成果発表会の準備段階で、アンケート、市場調査、インタビュー、インターネット検索によるリサーチ、パワーポイント作成などを通して、発表項目の展開の仕方が、それぞれの所属校ですでに徹底して訓練されていたということが判明した。

日本語教師以外の大学の教員による多数のミニレクチャーを受講することによって、大学の授業を体験する機会となった。

＊日本語Ⅲクラス（担当：家根橋）

クラス構成と授業のねらい:J-CATテストとオーラルテストの総計で13位～23位の学習者。全体的なクラス編成上、このクラスを10名の編成とした。台湾6名、中国2名、台湾留学中のマレーシア出身者1名、イギリス1名となった。女性6名、男性4名で年齢は19～22歳であった。日本語主専攻は4名、その他、外国語科目としての履修した者、塾で学習した者、独学した者など学習歴は様々であった。プレースメントテストにおいてもJ-CAT、オーラルテストともに大きな点数の開きがあった。このように学習者間のレベル差が大きいクラスではクラス運営上かなり困難に感じる点もあった。受講者の参加の動機は日本語のレベルアップを望むものが一番多かったが、同時に日本文化への関心も深かった。このプログラムにおける生活体験や観光を通して、習った日本語がどの程度通用するのかを試してみたいという意向も持っているようであった。また、サマーコースの総括として行われる学習成果発表のためにインタビュー練習を組み入れた。

教科書:文型練習を中心とした『中級を学ぶ中級前期』（スリーエーネットワーク）に加えて会話練習用の補助教材を併用した。選定した教科書は下位レベルの学習者には難しく、逆に上位レベルの学習者にとっては易しく、授業のレベル調整が非常に困難であった。

授業の工夫:学習者間のレベル差の問題を解決するためにチューターが大きな役割を果たしてくれた。チュートリアルの時間に各自のレベルにあった復習や応用練習をすることができた。また、学習成果発表会について、調査計画の立案、調査の実施、発表準備の全般にわたって学習者がチューターと相談しながら進める体制をとった。

また、教科書で扱われている各課のトピックについて教室外で直接日本人学生にインタビューする活動を積極的に取り入れるなどの工夫を行った。

盛夏期のコースであるため、コースが進行するにつれて学習者の疲労が蓄積し、クラスでの学習活動がにぶった。そのため日本の歌やことば遊び等の活動を取り入れ、リラックスできる時間の導入を心がけた。

成果:学習成果発表会においてはインタビューの練習の成果が十分に発揮されていた。授業とチュートリアルとの連携が相乗効果を生む結果となった。

＊日本語Ⅱクラス（担当：石口）

クラス構成と授業のねらい:J-CATテストとオーラルテストの総計で24位～33位の12

名。台湾９名、中国２名、イギリス１名の編成。全員女性で、日本語主専攻の学生は５名。プレースメントテストと J-CAT の合計点の差は最大で 65 点だった。初級後半から中級前半までの内容を踏まえて、四技能（読む・書く・聞く・話す）の習得を目的とした。
教科書：主教材として『げんきⅡ』(The Japan Times）と『中級へ行こう』(スリーエーネットワーク）を用いた。授業では初級後半の文型中心の『げんきⅡ』の第 19～23 課、中級前半の文型中心の『中級へ行こう』の第 1～4 課を取り扱った。また、アンケートシートの作り方やアンケート調査を行う方法などを授業で取り扱って、学習成果発表会におけるアンケート調査発表のための準備や練習をさせた。
授業の工夫：学習者間の差が大きいこと、全体的に流暢さが欠けることなどを考慮して、絵カードの使用及び基本文型のパターンプラクティスによって、文型と意味の定着を促した。それによって発話の自由度が高いペアワーク、グループワークへと展開していった。読解教材を扱う時には、内容確認だけで終わるのではなく、制限時間内に本文を音読する訓練などを行った。チュートリアルでは、学んだ文型をいくつか組み合わせて行うロールプレイやあるテーマについての作文・発表という生徒主導型の練習法を取り入れた。チューターとの連携を通して、初級後半から中級前半にかけての基本文型の定着がある程度見られたと判断する。
成果・課題：教室内の授業が多すぎると、どうしても文型中心になり変化が乏しくなってしまう傾向が見られた。日によって一日に、3 コマ（計 4 時間半）を同じ顔触れで授業を行うことになるので、同じ指導パターンではどうしても飽きがくる。ビデオなどの視聴覚教材などを適時取り入れる必要がある。また、一日の大半を留学生同士で過ごすことが多く、クラス外での日本語使用が限られていた。日本滞在中の生活の中での日本語使用場面に即した活動を授業に取り入れたり、日本人学生との交流をさらに増やしたりすることにより、クラス外での日本語使用を促す必要がある。

＊日本語Ⅰクラス報告（担当：徳永）
クラス構成と授業のねらい：台湾９名（女性 6 名、男性 3 名）、韓国１名（女性）からなる 10 名であった。初級レベルの内容に即した四技能（話す・書く・聞く・話す）の育成を目的とした。
教科書：初級向きの『げんきⅠ』(The Japan Times）を主教材として、『げんきⅠ　ワークブック』(The Japan Times）を宿題と演習のための補助教材として併用した。ひらがな学習に始まり学習した。『げんきⅠ』は英語が母国語の学習者を対象とした教科書であり、特に文法の論理的な解説が多い。そのため、台湾や韓国で日本語を学習し始めた学生にとっては、日本語を違った角度から見つめる機会になったと思われる。教科書の中の英語使用についてのコメントは皆無だった。プログラムの前半は話すことよりも書くことの学習に興味を示し、好んで取り組んでいるように見受けられた。後に話す能力も向上していったが、全般的にみると書くことに積極的であった。
授業の工夫：教材内容（第 12 課まで）の習得を推し進める一方で、作文練習を宿題として導入したり、口頭発表の機会をつくったりしながら、応用面の技能習得を指導した。プログラムの最終を飾る学習成果発表会のために活用できるような内容展開を図った。一

回目の作文（第3週目）の課題は日本に来て経験したこと、二回目は秋吉台、秋芳洞、萩の見学旅行を題材とした。講師自身が旅行に同行し内容を把握していたため、それぞれの学生がどの程度まで旅行の内容を日本語の文章で表現できるかを評価することができた。三回目の作文は自分の好きな町を題材とし、学習成果発表会の内容に活用させた。スクリーンで写真を使いながら内容を発表した。発表の本番では内容面だけではなく発音の面でも顕著な向上が見られた。これは発表の準備をする上でチュートリアルが大きな役割を果たしたものと考えられる。

チューターによるチュートリアルの時間は普段の授業とは異なった雰囲気の中での学習となり、授業の効果的なサポートになった。チューター全員が英語を話せたため、やさしい日本語に英語をまぜて意思の疎通を図っていた。チューター自身も海外留学の経験があり、年齢も近いために学生と打ちとけた関係を築いていた。

成果・課題：短期間で初級日本語教科書『げんきⅠ』の全12課を学習したという達成感が得られたと思われる。チューターとのせっかくの時間を本来の会話練習には使わずに、宿題をするのに利用したケースが数回あった。これはプログラムのスケジュールが過重で学生が日々のスケジュールに余裕をもってこなすことができなかったということの表れであるとも考えられる。

口頭試験と J-CAT の結果で日本語の向上が証明された。チュートリアルと見学旅行などの授業以外の活動が授業の補助的役割を果たしたものと判断される。また、英語が母国語ではない東アジアの学生が英語で解説されている日本語教科書を抵抗なく受け入れて使用したということ、このことは彼らの国際意識の高さと初級学習者としての柔軟性を表していると言えよう。

８．　チューターの登用

チューターは学内で公募し、希望者全員に「私の異文化体験」と言うテーマでレポートを提出させた。その上で個別に面接し、適任者を選出した。外国語運用能力に優れているチューターや海外生活を体験したチューターもいた。

学習面ばかりでなく生活上のサポート、さらには精神面でのサポートを通して、円滑なプログラムの推進に大きく貢献した。チュートリアルにおける既習項目の練習、発表のための準備や練習、見物や小旅行などの授業外活動などで、行動を共にしてコミュニケーションを深めた。各クラス（10人～12人の学生）に対して3人のチューターを配属し、教科書の予習復習・レポート作成の補助だけでなく、様々な話題についてお互いに語り合い、コミュニケーションの幅を深めた。チューターは学生間の微妙なレベル差を考慮しながら適切な指導をしていた。講師とチューターは日誌を交換することで、互いの進捗状況や学習成果を確認できた。

留学生との親密な交流を体験した一般学生の成長について杉原（2004）は次のように述べている。「本人達がそれまで気づいていなかった各自の潜在能力を開花させ始めた。異文化への関心、国際対応力、コミュニケーションの能力を短期に習得し、大きな変容を遂げて成長していった」。今回のプログラムに参加したチューターの場合も無意識のうちに大きな成長を遂げていた。外国人学生との交流を通し国際交流の真の意義を認識し、相互理解への意欲を深めていくチューター

の様子は実に頼もしいものであった。

９．地域社会との連携

このプログラムの大きな特徴の一つとして地域社会との連携が挙げられる。受講者は大学以外の場で様々な日本人とコミュニケーションを深めることができた。

料理教室では、講師や助手をしてくださったホストファミリーの他に、ソロプチミストの会員の協力も得られた。どこの国でも手に入る材料で、家庭的な料理である「三色丼」を作った。

大学の近く学校訪問では、５～6 年生の児童 4～5 名と留学生 3 名が 8 つのグループに分かれ自己紹介後、小学校の生活や将来の夢などについて話し合った。小学生は恥ずかしがることのなく、打ち解けた雰囲気で交流が行われた。留学生は自分自身の小学生時代を思い出したようで、日本の小学生の生活に深い関心を寄せていた。アンケートンの感想には「小学生よりも中学生との交流のほうがいい」という意見もあった。

10. アンケート分析結果

「先生の指導に満足的ましたか」という質問に対して 1 名を除き、43 名が「とても満足できた」「満足できた」と答えた。「先生たちはみんなすばらしかった」と言う記述もあった。「授業時間はどうでしたか」という質問に 28 名が「多かった」と答え、「適切」と答えた 16 名を大幅に上回った。授業の時間については、90 分授業が 3 コマある日もあり、「授業は午前中だけにしてほしい」「90 分授業は長すぎる」「60 分授業にして 20 分ぐらいの休み時間がほしい」「昼休みももっと長くしてほしい」などの意見があった。また、授業以外の活動に関しては、「主催者が全力で山口を宣伝したい気持ちは分かるが、日本に来る皆はやはりほかのところも見てみたい」「山口を探検してみたかった」「もっと自由時間にいろいろなことをしたかった」などの意見があった。また、開催時期に関しては7月を望むものが34名と一番多かった。

11. プログラムの成果

11-1 サマープログラムの三つの目標を達することができたかどうかを検証する。

①山口大学の留学生数を増やす

アンケート調査結果によると、山口大学留学へ特別聴講学生として 1 年間の留学を希望する者が 2 名、大学院進学を希望するものが 2 名（希望する日本の大学名は記載されていなかった）いた。再度当該プログラムへの参加を希望する者もいた。このうち実際に何人の学生が再び山口大学に留学するかは未知数であるが、参加者全員に日本語･日本文化に対する関心を深化させる契機を与えたことは将来の留学生政策に寄与するものと考える。アンケート調査の結果が示すように短期プログラムの意義が認識されたのである。

②日本語･日本文化への理解を深める

日本語･日本文化の学習の場を教室外にも拡張したことは効果的であったと思われる。日本語学習を日本文化体験と連動させたことによって学習者のモティベーションを高める大きな弾みとなったようである。将来日本企業または、日本と取引のある自国企業への就職を希望する参加者には大きな刺激となっていた。

③参加者の日本語でのコミュニケーション

能力を高める。

各クラスにチューターを配属してチュートリアルの時間を設け、正規の授業外でも既習項目の練習等を通して日本語を使用する時間を充分に与えた。これが功を奏して各クラスの受講生の日本語によるコミュニケーション能力にかなりの進歩が見られ、ほぼ全員が臆せず日本語が話せるようになった。

１ヶ月という短期のプログラムであっても、異国の地での初めての異文化体験は学生一人ひとりを大きく成長させうるものであることが実証されたという点において大変意義深いものであった。受講生からの様々な質問から、受講生が常に母国と日本を比較しながら日本への理解を深め、母国に対する認識も高めている様子が伺えた。

12. 今後の課題

①オーラルテストの実施上の課題

オーラルテストにより学習者一人ひとりのコミュニケーション能力が分かり、適切なクラスへの配置ができた。クラス分けのために長時間割くことは困難であるため、精度の高い設問を考え、採点の基準をより明瞭にする必要がある。

②J-CAT の課題

渡日前に１回目の J-CAT テストを実施し、終了時に２回目を行った。日本語Ⅲ・Ⅳの２クラスにおいて 9 名の者が終了時の J－CAT テストにおいて、得点が下がる結果となった。

表１　「2 回の J-CAT テスト結果」

	1回目（点）	2回目（点）
A	290	271
B	295	275
C	256	245
D	259	236
E	231	229
F	224	221
G	205	196
H	191	176
I	205	171
J	171	170
K	171	166
L	173	158
M	144	141
N	162	138
O	69	52

日本語Ⅳクラスの受講者は日本語専攻の学生が多数を占め、通訳や翻訳の仕事にかかわりたいと希望していた極めて優秀な学生であり、懸命に学習に励み、毎日レポートも提出したにも関わらず、J-CAT の得点が下がった原因はどこにあったのだろうか。原因を突き止める必要がある。受講生 44 名全員の調査においても、終了時（2 回目）の J-CAT テストの結果 15 名の受講生の得点が減少した。異なる時期の試験の等価値性に課題を残す結果にもなった。

③上級クラスの受講者には、日本人学生に交じって山口大学の正規の授業を体験したかったという希望があったので、できれば今後そのようなプログラムを実施したい。

④ミニ留学プログラムの事前打ち合わせが充分でなく、授業のための資料やシラバスを周知することができなかった。今後改善する必要がある。

⑤クラブ活動への参加を希望する受講生も多かった。期末試験の時期でもあり、日程調節も難しいと思われるが、一般学生との交流の機会を多くするための工夫が必要であろう。

⑥どの教室でも語学学習に必要な機材の設置が望まれる。
⑦各クラスの成績優秀者に奨学金を出すことをプログラムに明記して優秀な学習者の獲得を目指す必要がある。
⑧大学間で事前に話し合いを実施し、単位認定プログラムとすることが望ましい。

今回参加者には受講証明書を修了式の際に手渡し、帰国後、成績証明書とコースのシラバスを送った。受講生の原籍大学でもシラバスが検討され、今回のプログラム受講者に対して単位を認めるという大学もあった。今後多くの原籍校において、短期プログラムのシラバスの内容が検討され、単位認定が行われれば、学生の短期留学に対するモティベーションを上げることに寄与するものと考える。

おわりに

2010年の夏は30年来の猛暑であったにもかかわらず、どのクラスも出席率が極めて高く、病気で一日又は半日欠席した者が数名いたほかは、ほとんどの学生が皆勤であった。遅刻者もほとんどいなかった。それぞれの学生が各自の将来を見据え、日本語・日本文化への理解を深めることにより、将来何らかのかたちで日本と関係のある仕事に尽きたいという強い意欲が感じられた。

受講生の篤い志とそれに応えたいと思う教員同士の信頼関係、また、留学生支援室の細やかなサポートにより大きな成果を生むことができた。

杉原道子（留学生センター　准教授）
内山浩道（下関市立大学　名誉教授）
家根橋伸子（山口大学　非常勤講師）
石口智堂（広島県立松永高等学校　教員）
徳永慎太郎（オクラホマ州立大学　講師）

謝辞

山口大学留学生センター長、服部幸夫先生の行き届いたご指導、留学生支援室の事務スタッフの献身的なサポート、ミニ授業に参画くださった先生方（吉田一成機構長、服部幸夫留学生センター長、HINTEREDER EMDE FRANZ元留学生センター長、今津武先生、福屋利信先生、何暁毅先生、廣澤史彦先生、武本TIMOTHY先生、中溝朋子先生）また、見学旅行等の引率をしてくださった先生方（EDWARDS NATHANIEL TYLER先生、何暁毅先生、福屋利信先生）、また、プログラムの実施に御協力いただきました諸先生方に心よりお礼申し上げます。

【参考文献】

杉原道子　「大学に留学生を受け入れることの意味―大学、一般学生、留学生、地域にとっての意味を考える」『国立大学留学生指導研究協議会　留学生交流・指導研究』
第7巻（2004）pp51－63
坂野永理、大野裕、坂根庸子、品川恭子『初級日本語〔げんき〕Ⅰ』(1999)The Japan Times
坂野永理、大野裕、坂根庸子、品川恭子、渡嘉敷恭子『初級日本語〔げんき〕Ⅱ』(1999)
The Japan Times
平井悦子、三輪さち子『中級を学ぼう』(2007)スリーエーネットワーク
平井悦子、三輪さち子『中級へ行こう』(2004)スリーエーネットワーク
岡まゆみ、筒井通雄、他4名『コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語　上級へのとびら』(2009) くろしお出版

【注１】J－CAT2005 は山口大学国際センター（宮崎充保、渡辺淳一、今井新悟、杉原道子、赤木弥生、門脇薫）、e ラーニングサービス（秋山實）、島根大学（中園博美）、徳山大学（重田美咲）の共同研究開発プロジェクトである。

資料Ⅰ

2010年度山口大学日本語・日本文化サマー研修プログラム日程表 2010／07

日	曜日	午前		午後	
		8:40-10:10	10:20-11:50	12:50-14:20	14:30
7/11	日	到着日			
7/12	月	事務手続き 10:00～／ 施設案内		オーラルテスト13-15／J-CATテスト12-14:30／オリエンテーション15:30-16:30／開講式16:30-17／歓迎会17-19	
7/13	火	日本語授業	日本語授業	チュートリアル 13-15	
7/14	水	日本語授業	日本語授業	日本語授業	華道教室 茶道
7/15	木	日本語授業	日本語授業	市内見学(山口県立美術館・サビエル記念聖堂・瑠璃光寺五重塔)	
7/16	金	日本語授業	日本語授業	日本語授業（合同ホームステイ説明会）	チュートリアル 14:30-16:30
7/17	土	ホームステイ			
7/18	日	ホームステイ			
7/19	月	ホームステイ			
7/20	火	小串キャンパス訪問（服部）		宇部キャンパス訪問	
7/21	水	日本語授業	日本語授業	日本語授業	華道教室 茶道
7/22	木	日本語授業	日本語授業 （中級・中上級 小学校訪問）	日本語授業	チュートリアル 14:30-16:30
7/23	金	日本語授業	日本語授業	日本語授業（合同J-POP）	チュートリアル 14:30-16:30
7/24	土	フリー			
7/25	日	フリー			
7/26	月	日本語授業	日本語授業	日本語授業(市場調査)	チュートリアル 15-17
7/27	火	日本語授業	日本語授業	NHK見学 ／ チュートリアル16-18	
7/28	水	日本語授業	日本語授業(料理教室) 13:30まで		チュートリアル 14-16
7/29	木	日本語授業	日本語授業	マツダ自動車工場見学	
7/30	金	日本語授業	日本語授業	見学旅行説明会	チュートリアル
7/31	土	フリー			
8/1	日	見学旅行(秋芳洞・秋吉台・萩) 12:30-22:00			
8/2	月	日本語授業	日本語授業	日本語授業	チュートリアル
8/3	火	日本語授業	日本語授業	日本語授業	チュートリアル
8/4	水	日本語授業	日本語授業	チュートリアル(学習成果発表会準備)(13:00-16:00)	
8/5	木	日本語授業(学習成果発表会)	日本語授業(学習成果発表会)	オーラルテスト／J-CATテスト／閉講式／送別会	
8/6	金	フリー(帰国準備)		ちょうちんまつり 17:30-21:30 (着付け)15:00-17:00	
8/7	土	帰国			
備考		日本語授業（40コマ）1コマ目 8:40－10:10 2コマ目 10:20－11:50 3コマ目12:50-14:20			

五重塔

チューターとの交流場面

ミニ留学体験プログラム

ミニ留学体験プログラム

学習成果発表会

市場調査

小学校訪問

料理教室